

令和7年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
実施計画書（継続団体用）

活動団体の本事業での活動テーマ

『共同堆肥舎を中心とした

市民参加による地域循環型農業促進事業』

活動団体の活動地域：沖縄県中部地区

活動団体名：中部地区和牛改良組合

中間支援主体名：国立大学法人琉球大学

参加団体の基本情報

(1) 活動団体の基本情報

団体名	中部地区和牛改良組合
活動地域	沖縄県うるま市，沖縄市，宜野湾市，西原町，嘉手納町，読谷村

専門性・強み

#共進会
#基礎雌牛の選定
#種雄牛の選定
#産子の調査

団体概要
和牛の改良を計画的に行い、優良子牛を生産し、農家経営の改善・発展に期することを目的としている。 その目的達成のため、 <ul style="list-style-type: none">・基礎雌牛の選定及び保留・種雄牛の選定及び保留・産子の調査及び保留・飼養管理技術の改善普及・共進会・組合員研修，講習会・改良及び経営改善に必要なことなどに関する事業を行っている。

(2) 中間支援主体の基本情報

団体名	国立大学法人琉球大学
活動地域	沖縄県

専門性・強み

#日本で唯一島嶼亜熱帯地域にある総合大学
#生物多様性の基礎研究
#地域社会に貢献

団体概要
地域とともに豊かな未来社会をデザインし、アジア・太平洋地域の卓越した教育研究拠点を目指す。 日本最南端の亜熱帯島嶼域に位置する琉球大学の使命：島嶼という限られた空間、資源の中で持続的に生活をしていく“Island Wisdom”の提示。 地域固有の課題解決力の強化：大学、公共団体、産業界等が連携したプラットフォームを通じて、地域課題の解決に向けた取組を行う。

活動団体と地域の紹介

活動団体について

中部地区和牛改良組合は、2014年に設立され沖縄本島中部地区の6市町村（うるま市、沖縄市、読谷村、西原町、嘉手納町、宜野湾市）の畜産農家から構成されており、**組合員数は260名**でほとんどの組合員が**50歳以上**である。母牛の飼養頭数は3,000頭で、子牛の生産頭数はおおよそ2,000頭である。

本団体は、和牛の改良を計画的に行い、優良子牛の生産や牧草栽培の普及に携わり、農家経営の改善発展を目指している。うるま市の和牛農家においては飼料価格高騰への対応、担い手不足、**畜産廃棄物処理**が大きな課題となっている。

地域について



沖縄本島中部エリアは、それぞれに独自のカラーを持ったユニークなまちが集まっている。

読谷村：「やちむん（焼物）の里」として知られ村内にはたくさんのやちむん工房がある。読谷村は西海岸に面しており、残波岬から眺める夕陽は必見。

嘉手納町：日本における甘藷（サツマイモ）発祥の地。戦後は町域の82%が米軍基地によって占有されている。東シナ海へ注ぐ本島最大の流域面積で、流水量も豊富な2級河川の比謝川がある。

沖縄市：県内で那覇市に次いで人口の多い、沖縄とアメリカ文化が入り混じった「チャンプルー文化」の町。ライブハウスも多く、オキナワンロックや民謡、エイサーなど多様な音楽文化が楽しめる。

うるま市：うるま市は、離島を有し海中道路を渡って行ける浜比嘉島や伊計島には、離島ならではの素朴な風景を眺め癒しを求めることができる。また、うるま市は闘牛がさかんな地域である。

宜野湾市：那覇市の外延的な拡大に伴い、市街地化が進展しつつありシティーリゾートとして人気なまち。

西原町：幼児教育から大学教育が可能な教育施設に恵まれた「文教のまち」。

活動団体の目指す地域の姿

■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

農家と市民の行動変容によって、畜産廃棄物の適正処理を行い牧草地や農耕地へ還元するといったことが当たり前前にできている地域

⇒ 堆肥の循環により、後世に誇れる持続可能な農業ができる環境にも人にもやさしいまち

■地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

- ・ 堆肥製造業者による堆肥化技術の導入
- ・ コントラクター事業の創出
- ・ 自治体・JAとの協力による耕畜連携の推進
- ・ 組合で活用できる共同堆肥舎の設立

■ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ・ 効率的かつ品質の良い堆肥作り
- ・ 堆肥の普及・販売
- ・ 沖縄県中部地区の畜産農家と耕種農家のマッチング
- ・ 中部地区和牛組合産堆肥を用いた農作物の地産地消活動
- ・ 食品廃棄物を活用した飼料づくり

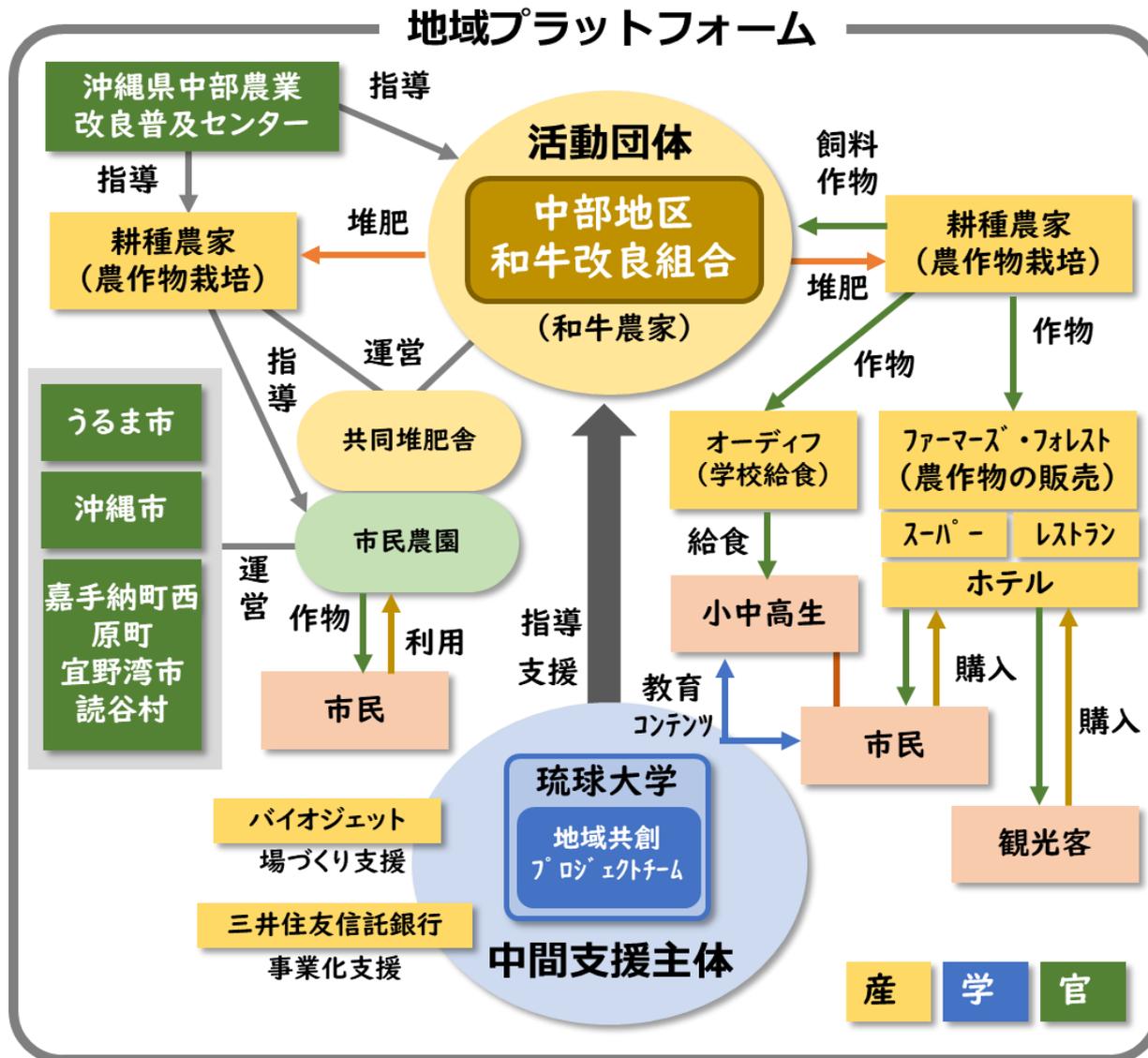
■地域の現状と課題

農作物では、サトウキビ以外にも、やまいもや津堅ニンジンなどが有名な地域であり、畜産では繁殖農家が97%を占め、飼養頭数40頭以下の小規模農家が点在している。

【課題】

- ・ 畜産現場から出る悪臭
畜産農家の牛舎まわりに民家が押し寄せてきていて、肩身の狭い思いで経営を行っている。
- ・ 畜産廃棄物の不適切な処理による環境への悪影響
畜産廃棄物を積んでおけば堆肥になるという、堆肥化方法の違った認識をもっていること、これまで無償で回収されていた畜産廃棄物が有料となってきたことによる不適切処理の蔓延による環境負荷が懸念される。
- ・ 食品廃棄物の有効活用の余地がある
うるま市では経産肥育にとりくむ農家さんも出てきている。その餌を地域資源を活用して作っていく必要がある。

“地域プラットフォーム”のイメージ



ローカルSDGs 事業の詳細

事業名称：共同堆肥舎を中心とした市民参加による地域循環型農業促進事業			
あらすじ			
<p>耕畜連携を行うために、まずは畜産廃棄物利用促進をするための堆肥舎を設立をし、良質な堆肥の地産地消を行う。堆肥舎を中心とした、食資源循環を行うことにより、地域住民のシビックプライドの醸成を図っていく。</p>			
ストーリー			
<p>畜産廃棄物の不適切な処理により、畜舎周辺住民に迷惑をかけている農家が多い。また、排泄物の野積みにより地下水や海洋への栄養塩流出により環境汚染につながっていると思われる。観光立県沖縄において、海洋汚染は県観光経済の大きな損失にもつながる。そこで、農家の意識改革を目的に、畜産廃棄物の堆肥化を推進していく。堆肥化を進めるための、共同堆肥舎設立に賛同する農家（出資者）を探し、体制を整える。堆肥の地産地消により、畜産農家の経営改善、耕種農家の経営改善を図っていくと同時に、ここで得られた環境配慮型肥料と環境配慮型作物を、ブランド化して食の資源循環を行い、シビックプライドの醸成により地域課題解決のために積極的に参加する人が増え、住民主体の活動が活発になる社会を創っていききたい。</p>			
事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック	
①ありたい未来	<ul style="list-style-type: none"> ・中部地区で食資源循環型社会が創られる ・地域資源の活用を進め、ブランド化された環境配慮型食品の利用が進み、美しい自然が守られ、子や孫にも継承される農業形態が確立されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・小規模農家が多いこと ・畜産廃棄物の適正処理に対する意識の低さ 	
②課題	<ul style="list-style-type: none"> ・家畜排泄物処理問題をどのように取り組んでいくか？ ・共同堆肥舎設立をどのように行うか？ ・畜産農家間の連携強化および耕畜連携ネットワークをどのように構築していくか？ 		
③なぜこの事業をやるのか（Why）	<ul style="list-style-type: none"> ・担い手不足を解消するために、誇りの持てる農業システムを構築するため ・農業から地域のさらなる活性化をはかるため 		
④地域資源	<ul style="list-style-type: none"> ・食品残渣（沖縄特産の紅芋など）・農作物「やまいも」、「ニンジン」、「びわ」 ・家畜糞尿 		
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	<ul style="list-style-type: none"> ・堆肥の運搬・散布などの「ゆいまーる」的コントラクター事業の設立 ・地域資源（食品残渣）を用いた、飼料開発および畜産物のブランド化 		
⑥担い手（Who）	<ul style="list-style-type: none"> ・畜産および耕種農家 		課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で排出される、有機性廃棄物が適切に処理され、食資源の好循環が生まれる 		<ul style="list-style-type: none"> ・県・市町村、行政の理解と協力 ・地域のスーパーやホテル（地域食材を扱ってくれる業者） ・食品加工所
⑧事業で生じる成果	<ul style="list-style-type: none"> ・共同堆肥舎の利用により、畜産農家間の連携の強化により、家畜糞尿の適切な処理が行われ、堆肥の地産地消が進む ・住民が環境配慮型食品の価値を見直し、地域資源の利活用が進む 		

3カ年状態目標

■2026年度末の状態目標

・事業を考える・生み出す

共同堆肥舎を中心とし、地域プラットフォームによる地域資源循環型農業を実現する。具体的には、共同堆肥舎にて作成された堆肥が、農家間ネットワークにより市民農園や耕種農家の農地へ還元され、そこで得られた農産物が、地域のステークホルダーなどで利用されることを目標とする。また、これまで未利用であった地域資源を有効活用した経産牛肥育牛肉を中部地区の新たなブランドとして販売を開始することを目標とする。耕種農家向け堆肥活用の勉強会を実施し、堆肥の購買意欲を高める。

■2025年度末の状態目標

・体制を整える、仲間を探す

ステークホルダー間での地域資源循環社会におけた実施体制の検討をし、連携を強化する

・事業を考える

畜産農家向け堆肥化勉強会の実施、有機農業に取り組む生産者の圃場を視察、地域資源活用経産牛肥育の試行開始

・地域のビジョンを描く

循環型農業実現WSの開催

■2024年度末の状態目標と振り返り

・体制を整える

中部地区和牛組合内での連絡体制を作り、各イベントでの参加数を一定数確保する

・仲間を探す

うるま市循環型農業推進協議会を活用し、耕種農家との意見交換

・事業を考える

畜産農家向け堆肥化の勉強会の実施、各地の堆肥センターの視察

・地域のビジョンを描く

ビジョン形成WSの開催

中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての獲得目標

- 琉球大学では、地域貢献をミッションに掲げているが、地域の農家との「知の共有」があまりなされていないのが実状である。中間支援主体が、積極的に農業生産現場へ出向き、地域課題に対する解決策を共に考え、課題解決に向かうよう舵取りをしていき地域から信頼される存在になる。
- 対話と協働のコーディネート力を向上させ、地域の多様性を活かした共創型の支援体制を構築していく。

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

- 活動団体が望む共同堆肥舎を地域に据え、家畜排せつ物の不適切な処理が解消され、堆肥を余すことなく活用し化成肥料の使用量を低減させ、耕畜連携が十分にできているといった、地域資源循環モデル地域を作り、これを県内各地域へ展開していくための支援を続けていく。

中間支援主体の支援・取組計画

■ 中間支援主体の1年間の支援目標

行政関係者との協働を推進していき、畜産農家の堆肥化に対する理解を深めていくとともに、共同堆肥舎の運用規定、堆肥の出口戦略（堆肥使用農家への販売）を考え、農家の資源循環に対する意識改革を図っていく。

■ 支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	共同堆肥舎を建設するという目標を掲げているが、行政の巻き込みが、もう少し足りない。	行政側（特に沖縄県）との対話を粘り強く行うようにする。
②	共同堆肥舎のビジョンはあるが、具体的にどのように運用していくかがまだ決められていない。	地域の関係者との対話の場を積極的につくり、対話を通してわだかまりが無く運用できるルール作りをする。
③	耕畜連携を目指す農家間のマッチングがあまりできていない。	うるま市循環型農業推進協議会を活用し、耕畜連携に関する具体的対策案について意見交換をするよう勧め、畜産農家と耕種農家の関係性を構築していけるようにする。

活動・支援スケジュール

■スケジュール



備考（補足説明など必要な場合は記載）

*協議会とは、うるま市循環型農業推進協議会のこと。開催月は5月以外は未定